「便利」の裏側は誰が守るのか　サイバー攻撃から考える、見えない仕事の価値

最近、企業や団体へのサイバー攻撃により、情報流出やシステム障害が発生したというニュースを目にする機会が増えました。業務やサービスが停止すれば、企業は復旧や顧客対応に追われ、取引先や利用者にも影響が広がります。

被害が発生すれば、その原因や企業の対応は大きく取り上げられます。一方で、「システムは止まらず、商品は予定通り届き、資料にも間違いはありませんでした。」といった情報は、特別な事情がない限りニュースになりえません。それは当たり前の一日にも見えますが、本当にそうでしょうか。

私たちは日々、さまざまな「便利」に囲まれています。スマートフォンで予約し、キャッシュレスで支払い、クラウド上で資料を共有します。こうした仕組みは、生活や仕事に欠かせないものとなりました。

その一方で、システムが通常通り動いているとき、それを支える仕事は見えにくいものです。点検や更新、データのバックアップ、不審な通信の監視など、便利さの裏側には地道な作業が積み重ねられています。それでも事故が起きないことで、その成果が表立って評価される機会は多くありません。

これは IT やセキュリティに限った話ではありません。仕事の成果は、ときに「ゼロ」という形で表れます。事故ゼロ、誤りゼロ、遅延ゼロ、情報漏洩ゼロです。何かを増やすのではなく、起こり得た問題を防ぐことにも価値があります。

ただ、問題が起きない状態が続くほど、その仕事は「なくても困らないもの」に見えてしまいます。効率化やコスト削減を進めるなかで、予防のための仕事が削減の対象になりやすいのは、その成果が見えにくいからでしょう。

これまで問題がなかったことだけを理由に、備えを不要と判断するのは危ういです。問題が起きていないのは、リスクがないからではなく、誰かの備えが機能しているからかもしれません。

予防にかかる費用は目に見えますが、それによって避けられた損失は見えません。バックアップや設備点検、複数人による確認には、人手も時間もかかります。しかし、何も起きなければ、どれほどの損失を防いだのかを示すことは困難です。

このことは、一人ひとりの働き方にも通じます。メールを送る前の宛先確認、資料と元データの照合、引き継ぎ内容の記録。こうした目立たない確認の積み重ねが、日々の業務

当コラムの著作権は株式会社帝国データバンクに帰属します。著作権法の範囲内でご利用いただき、私的利用を超えた複製および転載を固く禁じます。

©TEIKOKU DATABANK, LTD.

を支えています。

便利さは、新しい技術やサービスだけで生まれるものではありません。安全かつ安定的に使える状態に保たれて、初めて日常の一部になります。

システムが動きました。商品が届きました。資料に間違いはありませんでした。今日も大きな問題は起きませんでした。

その一日の裏側には、誰かの点検や確認、そして備えがあります。「何も起きなかった一日」は、何もしていなかった一日ではありません。目に見える成果だけでなく、問題を起こさなかった仕事にも目を向けることが、日々の便利さを守る第一歩になるのではないでしょうか。

情報統括部　情報統括課
中村駿佑

当コラムの著作権は株式会社帝国データバンクに帰属します。著作権法の範囲内でご利用いただき、私的利用を超えた複製および転載を固く禁じます。

©TEIKOKU DATABANK, LTD.